37.
空を飛ぶ鳥のごく短い瞬間は静止の姿で表われる。これは全く動きのない静止とは違っている。とぶ動きを内蔵している静止の姿である。

このことを頭に入れながら俳句を作ってみよう。

大体対象の自然はいつも流れているのである。冬が去り春が来ることも流れの時間である。花が咲き散りはてるのも流れの現象である。常識はその流れをまとめて説明するのである。

しかし俳句を詠むにはこの常識を避けるべきである。直感を尊重する。直感というのは即刻の感動、短い瞬間に対象の形を補足するのである。それはワンポイントをねらい打ちすることになろう。

捉えた対象は静止の姿であるがゆえに実に具体的なのである。流れるとぼやけるのである。

芭蕉は「飛花落葉の散り乱るるもその中にして見とめ聞きとめざればおさまることなし。」と教えたのはその瞬間を堰きとめて詠めということである。

38.
花が咲き野山の霞がたなびく頃になった。

私は芭蕉の「辛崎の松は花より朧にて」を脳裏に浮かべる。なぜかといえば去来抄で問題にされた「にて」留めのことである。最後に芭蕉は其角や去来が解くのは皆理屈である。自分はただ花より松の朧にてで面白かっただけだと述べている。

ものは形にとらわれがちに解釈する。「にて」は連句の第三に使うのだからと決めると、自由無礙（むげ）の境地が失われる。

自由と放縦とを一緒に見ては話にならず、真実の自由とは形に縛られず、のびのびと働けることである。形を十二分に尊重しなければならないが、その形にとらわれるのではだめだということと思う。

判ったようなわからないような気がする。これは悟って知るほかはない。

ただ辛崎の松がうす墨色にやや華やかな空気に包まれてほんのり姿を浮かした景色をいつも眼前に見る気分になれば、それで言うことはないのだ。

そのように努めて素直にやりたいものである。

39.
ことに俳句は平明に叙するを好しとする。先師虚子は「虚子俳話」の中に力説されている。

平明とはどういうことか。
平らかに調子良くすることが平である。
印象を明瞭に、そして表現を曖昧にせぬことが明であると思っている。

黄金を打ちのべると、柔らかく平らになってゆく。そういう気持ちで従順に詠むべきであると芭蕉がさとした。

次に表現は意思伝達なのだから、簡明なのが一番よろしい。鬼面人をおどすような、舌を咬むような、何を叙べたいのか一向に分からぬ難解の俳句は下の下と私は考えるのである。

今述べた平明は実に優しく見える。しかしながらこれは実に困難である。どうすればよいか。

平素の修練を重ねるしかない。修練によって了得することができる。